

第68回日本小児保健協会学術集会 in 沖縄（大きな和）

公益社団法人 沖縄県小児保健協会
会長 宮城 雅也

2021年6月15・16・17日（金・土・日）の3日間、沖縄コンベンションセンターにて第68回日本小児保健協会学術集会が開催されます。参加される誰もが有意義な内容になるように、沖縄県小児保健協会は現在準備を進めております。学術集会は全国各地で開催されてきましたが、沖縄県での開催は、2回目となります。最初の開催は、今から約40年前の昭和57年に、知念正雄会長のもとで、第29回日本小児保健学会（9月30日から2日間）が、那覇市民会館を主会場に、市内5会場に分かれて、全国から1,663名の参加者を得て開催されました。当時は、沖縄での全国規模の学会は珍しく、初めての経験でしたが、沖縄県の会員が一致団結の下に成功させ、その後の沖縄県での小児保健活動の発展の源泉となりました。今回はその経験を踏まえて、過去と現状の小児保健を分析研究し未来社会の活動へとつなげていく使命があると考えます。

第68回学術集会のテーマは、「大きな和で育む子どもの未来」に決まりました。「大きな和」は、沖縄のころ、「ゆいまーる」を表しており、皆が協力しあって子ども達の未来を拓いていくことを表しております。大きな和は、古来の日本「大和」の心でもあり、多種多様な人々を快く受け入れていく「和の心」を表しています。「ゆいまーる」は、日本古来の心であり、人の繋がりを大切にすることを続けていくことで、子ども達の未来を明るくしていくことになると信じています。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、世界に大きな衝撃を与えました。第二次世界大戦以来の世界規模の災害となっており、日本小児保健協会の学術集会にも影響を与えております。東京オリンピックが延期になったように、今年の久留米での学術集会も6月から11月へと延期になっております。県民の行動が制限され、多くのイベントが中止となり、経済的損失は、世界大戦にも匹敵するものになっています。このような社会活動制限の中では、弱者である子ども達に対してマイナスの影響が大きくなっています。家庭が益々孤立化し、以前より問題となっていた、家庭内暴力、虐待など社会の問題が次々と明確になってきています。感染症のパンデミックは、災害と同じで、その対策には、「公助」、「共助」、「自助」の力が必要になります。「公助」である市町村は、災害時はなかなか動きが取れなくなります。平常より個々の家族支援体制を構築しておく必要があります。「共助」である地域（近所・自治体など）支援体制を構築し、災害時でも早期に支援できることです。それに加え「自助」である家族の「保健力」を高めることです。家族自身で問題を解決する力、支援を求める力を養うことも重要になってきます。「保健力」とは、自らが健康を保つ力のことで、小児保健に関わる人たちが、最終的に家族に求めるものであり、家族支援の在り方の方向性が見えてきます。

新型コロナの影響で、乳幼児健診でも、感染予防の点から各地で中止・延期が続いており、小児保健活動の危機でもあります。逆にこのような時に基本に戻り、小児保健活動の地盤固めをしっかりとし、どんな災害でも、子ども達を守れるようにすることが大切です。それは子ども達に健康をしっかりと保つ力「保健力」

をつけることで、日頃から、子どもの生活習慣を確立することです。子どもの生活習慣である五育（生育・食育・嚙育・睡育・遊育）をしっかりと確立していくことです。五育とは、生まれ育つ（生育）、食べて育つ（食育）、嚙んで育つ（嚙育）、睡て育つ（睡育）、遊び育つ（遊育）のことで、人間の生理に基づいた生活習慣確立は、子どもの保健力を高める重要な要素になってきます。そのためには、多職種、地域の人たちが、「大きな和」で連携して大きな力を発揮することです。それが「大きな和で育む子どもの未来」に繋がると思います。